社会連携プログラムレポート

mediaction

メディアクション

Vol.01

2020 創刊号

特集　新型コロナで変わったこと

目白大学メディア学部
Mejiro University Faculty of Media Studies

メディアでアクション　MEDIACTION

MEDIACTION は目白大学メディア学部の「社会連携プログラム」の愛称です。

メディア学部の学びの大きな特徴となっているのがこの「社会連携プログラム」で、2 年次から全員がこのプログラムに参加します。 メディア基礎演習 (2 年次) では、企画の立て方や調査手法、イベント実施のシミュレーションなど活動を行う上で必要となる知識・技術を習得。メディア実践演習 (3・4 年次) では、自治体や地域団体・企業など、学外のさまざまな組織と連携しながら活動します。さらに、インターンシップ (2~3 年次) で就業体験を行い、卒業後のイメージを明確にしていきます。

メディアを学ぶ。社会とつながる。

現代社会におけるメディアの役割をより幅広く学べるように、テレビ、広告、新聞、雑誌、アニメなど従来のメディアに加えて、イベント、動画配信、AR(拡張現実)・VR(仮想現実)、ウェブデザインなど近年、注目を集めている領域に対応した科目を設置しています。

来るべきメディア社会を構想し、人間の生活にメディアを役立てていくことを目指しており、理論と実践をバランスよく学ぶことを理念としています。常に何をするためのメディアなのか、メディアを利用する目的は何か、いかなる社会貢献、変化を達成しようとしているのかを考えながら社会とつながり、メディアで社会的アクションを起こしていき、よりよい社会をつくることを目指しています。

教室を飛び出し、メディアの力で社会に貢献

本冊子に掲載されているのは、そのさまざまな実例です。一読していただければ、各クラスが具体的にいかなる MEDIACTION を実践しているか理解していただけるでしょう。また、最後の２つはインターンシップの実例です。各記事には、参加した学生のコメントが載っており、加えてスマートフォンを QR コードにかざして、その学生のインタビュー動画を観るためのウェッブサイトに接続できます。

※社会学部メディア表現学科は、2018 年 4 月にメディア学部メディア学科へ改組され、 2020 年 4 月の時点で、メディア表現学科は 4 年生のみとなります。また､「クラス」というのは 10 人前後のクラスナール形式の授業で､メディア学部のメディア基礎演習やメディア実践演習は「クラス」という名で統一されています。メディア表現学科の「クラス」として行われた実例も掲載されていますが、混乱を避けるために担任の先生の名を冠して「何々クラス」と統一しました。

INDEX

大学生観光まちづくりコンテスト 2019 4
牛山クラスが「大学生観光まちづくりコンテスト 2019 本選ポスターセッション」に出場！

Youth Enterprise Trade Fair 6
メディア表現学科の原克彦クラスが「Youth Enterprise Trade Fair」で 7 回目の受賞

「MEJImag」フリーペーパー大賞入賞 8
メディア表現学科三上クラス制作の地域情報誌『MEJImag』が、日本タウン誌・フリーペーパー大賞 2018 のコミュニティ・ライフスタイル部門で優秀賞受賞！

めじアニメチーム３位入賞 10
ASIAGRAPH Reallusion Award 2018 日本予選会でめじアニメチームが 3D 部門で 3 位入賞

ドローンを使った桜回廊の PV 映像 12
メディア学科西尾クラスとさいたま市の共同制作・ドローンを使った、見沼田んぼの桜回廊の PV 映像のロングVer. 公開！

ピンクリボンデザイン大賞のコピー部門 14
「第 15 回ピンクリボンデザイン大賞」のコピー部門でファイナリストに選ばれました！

ロボット・ペッパーと落語のコラボ 16
「感情を持った」パーソナルロボットには愛着が湧きやすい

聖地巡礼インターン 18
メディア表現学科とメディア学科の学生が岐阜県の飛騨市観光協会で「聖地巡礼インターン」を行いました。

イベント業界インターン 20
メディア表現学科の「イベント業界インターン」が開始！

新型コロナで変わったこと 22
目白大学・各クラスからのメッセージ

目白大学生が見た新型コロナ 28
編集後記に代えて

表紙デザイン　横手 理南

大学生観光まちづくりコンテスト 2019

牛山クラスが「大学生観光まちづくりコンテスト 2019 本選ポスターセッション」に出場！

9 月 18 日（水）と 20 日（金）に、牛山佳菜代クラスに所属する社会学部メディア表現学科の学生が「大学生観光まちづくりコンテスト 2019 本選ポスターセッション」に出場しました！

牛山 クラス

「大学生観光まちづくりコンテスト」とは、大学生がフィールドワークなどを通じて調査・分析を行い、新しい観光まちづくりのアイデアの提案を競い合うコンテストです。２０１１年から毎年開催されており、参加チームは年々増加しています。今年度は、茨城、北陸、長崎のしま、訪日インバウンド、関東 RiverCycRing の５つのステージが開催されました。

牛山クラスは、茨城、訪日インバウンド、関東 RiverCycRing の、３つのチームに分かれてエントリー。そのうち2チームが本選のポスターセッションに選出されました。

茨城ステージのポスターセッションに選出された「チームメジらき」（4名）のテーマは、「Make Up ＃ＮＥＯ茨城」。入込客数が少ない県南地域に着目し、茨城県を模した小さな茨城（＃ＮＥＯ茨城）を考案しました。観光客のみならず地域住民にその魅力を再発見してもらうことを目的に、現地でのフィールドワークを元に、地域の歴史や伝統的なお祭りを核とした周遊プランを企画。さらに、メディア表現学科で学んできた知識を活用し、伝統的な提灯とドローンなどの最新技術を融合させることでＳＮＳでの情報発信を促す企画も提案しました。

ポスターセッション会場の様子（茨城ステージ）

関東 RiverCycRing のポスターセッションに選出された「チームペダル」（3名）のテーマは、「よく学び、よく遊ぶＮＯＤＡ」。千葉県野田市役所への２回のヒアリングを元に、リピーターの増加と、サイクリングを市内へ周遊するきっかけを作ることを目的とした2つのプランを企画。親子で楽しめるように、デジタルスタンプを使い市内の名所を周遊するサイクルラリーと、ラン・バイク・野田市クイズの３つで順位を競い合うトライアスロンを提案し、駅広告などを活用したＰＲ方法についても具体的な提案を行いました。

残念ながらポスターセッション賞を受賞することはできませんでしたが、会場に集まった聴衆に向けて、それぞれ工夫を凝らしたプレゼンテーションを行いました。学生にとっては、初めての経験ばかりでしたが、実際に現地に何度も足を運ぶ中で、メディア表現学科での学びをどのように社会で活かせるのか考える機会となりました。

本選会場となった
さいたま新都心合同庁舎
（関東 RiverCycRing ステージ）

ポスターセッション発表を行う学生たち
（関東 RiverCycRing ステージ）

ポスターセッションの内容
（関東 RiverCycRing ステージ）

発表ギリギリまでリハーサルを繰り返す
学生たち（茨城ステージ）

参加した学生たちの感想

◎実際に現地調査に行き、取材を通して地域の人たちのニーズを知る。茨城県まで行くことは大変でしたが、普段の生活では触れられないようなことにも触れることができたので、地域づくり、まちづくりに対する視野がさらに広がったと思います。

◎茨城県の現状を様々な点から調査・分析し、課題を発見する力を身につけることができた。

◎初めてここまで大きなプロジェクトに挑んだが、「まちづくりってなに?」から始まり、いろいろ考えプランを完成させることができてよかった。

◎企画側の意図や想いだけでなく、そのプランをよりよくするには参加者の立場に立ってみて考える姿勢が大切だと思った。

◎企画立案は、たわいない会話の中から生まれるひらめきが、より面白く楽しそうな企画へと繋がることがあるということを学んだ。

◎プロジェクトをチームで進めるノウハウを蓄積することができた。

クラス長　入山 優也さん

学生コメント

「大学生観光街づくりコンテスト２０１９」への参加が決まった時、最初は広い茨城県のどういうことをどうやって特集するかかなり不安でした。ですが、インタビューを進めていって地域の課題や要望、特徴や素晴らしいところなど色々聞いて行く中で、その地域に住んでいる人たちが何を求めているのか、明確なニーズを知ることが出来ました。

牛山クラスでは普段から、メディアを利用した地域活性化をテーマに活動をしています。その点、今回のコンテストへの参加、及び本戦ポスターセッションに出場できたことは今後の活動にも繋がるいい経験になりました。茨城県まで実際に行って調査をするのは大変でしたが、普段の生活では触れられないようなことにも触れることができたので、地域づくり、まちづくりに対する視野がさらに広がったと思います。

深く知らない初めての場所で実際に地域の人たちと触れ合えたことは本当に貴重な学びでした。

動画はこちら

Youth Enterprise Trade Fair

メディア表現学科の原克彦クラスが「Youth Enterprise Trade Fair」で７回目の受賞

原 クラス

ポスターセッション会場の様子（茨城ステージ）

２０１８年12月２日（日）に京都大学の百周年時計台記念館で開催された「Youth Enterprise Trade Fair ２０１８」に、社会学部メディア表現学科の原克彦クラスの学生12名がメディア活用ゲーム研究開発会社「めじらぼ」（仮想会社）を出展しました。

「Youth Enterprise Trade Fair」の開催は今回で18回目を迎え、原クラスは11回目の参加になります。このフェアは、起業に向けたアントレプレナーシップ（起業家的行動能力）を発揮できる若者を育成することを主な目的とし、毎回小学生から大学生まで約30チームが参加しています。起業事業の目的や事業内容、広報戦略、出資計画をはじめ、社会貢献度、地域との連携、ホームページ、当日の出展内容、接客態度、プレゼンテーションなどが総合的に審査されます。原クラスは、前年度に引き続き「実際に起業するなら応援したいチーム」に贈られる異能工房賞を受け、他の入賞歴を含め７回目の入賞となりました。

今回は、身近な環境問題に焦点を当て、子どもがリサイクルに興味や関心を持ち、将来に向けて他の環境問題にも興味を持つことを狙いとしたサービスや商品を提供しました。具体的には、ＶＲ（仮想現実）技術を用いて、仮想空間に散らばっている空き缶やペットボトルなどを左右の手に持った機器で集めるという街中でのごみ収集の体験や、集めたごみを実空間で実際に分別する体験をした後、絵本を用いて分別内容の理解を行い、最後にテレビゲームを利用してリサイクルの流れを確認するというものでした。ＶＲ映像、絵本、ゲームはクラスで開発し、小学生から年配の方まで１００名を超える皆さんが体験しました。

子どもや大人であふれるブース

VR でゴミを拾い集めている子ども

審査員からは、「今後も新しい商品開発を行い、来年も参加してください」という特別メッセージがありました。

【受賞歴】（2014 年は不参加）

賞	イベント名および仮想企業名
異能工房賞	トレードフェア 2018 企業名「めじらぼ」
異能工房賞	トレードフェア 2017 企業名「あらーむ」
異能工房賞	トレードフェア 2015 企業名「まな boo」
特別賞	トレードフェア 2013 企業名「パズけん」
異能工房賞	トレードフェア 2012 企業名「あそびラボ」
京都工業会賞	トレードフェア 2011 企業名「アジカル」
京都商工会議所賞	トレードフェア 2010 企業名「MANABEE」

リサイクルの手順をゲームで確認している子どもたち

学生コメント

原クラスの主な活動は、子供向けの教材などの制作です。クラス生全員で一つのものを制作することもあれば、すべて自分一人で制作することもあります。原先生はメディア関係全般に詳しいので、クラス活動では基本的に自分がやりたいことを自由にできました。また、今まで自分の発想ではなかった考えなど、いつもプラスになるアドバイスをいただけるので、原クラスに入ってよかったと思います。

天野 駿さん

今回「Youth Enterprise Trade Fair」で出展した「めじらぼ」は、約半年の準備期間をいただいてクラス生全員で制作しました。工夫した点は、体験型のＶＲゲームにすることで、小さい子供から大人まで、幅広い年齢層の方が楽しめるコンテンツになるようにしたことです。これまでは個人での制作でしたが、この「めじらぼ」はクラス生全員で作り上げなければならないものだったので、とても大変でした。また、実際に京都大学で出店することになっていたので、今までの課題とは違い、期限までに必ず終わらせなければならないという責任をより感じました。本来の計画通りに作業が進まず苦戦した部分もありましたが、クラス生全員で助け合いながら制作することができたので、とてもよい経験になったと思います。

動画はこちら

「MEJImag」フリーペーパー大賞入賞

メディア表現学科三上クラス制作の地域情報誌『MEJImag』が日本タウン誌・フリーペーパー大賞 2018 のコミュニティ・ライフスタイル部門で優秀賞受賞！

三上クラス

MEJImage Vol.3 表紙

三上義一クラスの学生が中心となって企画・制作を行っている地域情報誌「MEJImag（めじマガジン）」が、「日本タウン誌・フリーペーパー大賞2018」のコミュニティ・ライフスタイル部門で優秀賞を受賞しました。

「MEJImag」は、毎号、西武信用金庫の支店がある商店街およびその近辺を特集しており、街の活性化を図ることを目的としています。学生は自分たちで企画を立て、商店街にある飲食店や付近の文化施設、イベントなどを取材し、編集まで行います。毎号3000部を発行し、西武信用金庫と連携して配布しており、街の活性化に貢献してきています。

「日本タウン誌・フリーペーパー大賞」は、一般社団法人日本地域情報振興協会（NiCoA）が主催するイベントで、毎年、各地のタウン誌やフリーペーパーに参加を呼びかけ、参加する媒体を誌面のクオリティや読者の支持率など多彩な視点から審査し、評価の高い媒体を表彰するものです。過去には、「目白大学新聞」がタブロイド部門で優秀賞を受賞しています。今回「MEJImag」が受賞したコミュニティ・ライフスタイル部門は、地域に密着したコンテンツを中心に、その地域の人々への有益な情報に関して、企画や表現力に優れている媒体に与えられる賞です。

編集長の三上クラス3年・田代梨紗さんは「初めての雑誌制作で、戸惑うこともたくさんありましたが、クラスの皆と協力して良いものを作り、優秀賞を受賞することができ、とても嬉しく感じています。この経験を糧にし、これからも頑張っていきたいと思います」と喜びを語り、同じく編集長の3年・廣瀬瑞華さんは「初めてで大変な作業ばかりでしたが、田代さんと二人で協力しながら（編集長の仕事に）挑みました。今回優秀賞を取れたのも取材に尽力した皆の成果だと思います。取材に協力してくださった方々にも感謝し、この受賞を生かして次は目白大学新聞をより認知してもらうように精進したいと思います」と今後の目標を語りました。

また、発行人・メディア学科長の三上教授は「今回の受賞は腕を磨き、技を極めようとしている人々のこだわりに注目したことが評価されたのだろうと思います。それも一冊丸ごと特集を組み、伝統芸能から最先端のメディアアートまで取材したことが功を奏したのでしょう。今後もユニークなアングルで街や地域を紹介していきたいですね」と述べていました。

「MEJImag」4号、学生フリーペーパーフォーラムでベスト6に！

三上クラス生が中心となって制作した「MEJImag」4号が、学生フリーペーパーフォーラム（Student Freepaper Forum SFF 2019）のコンテストで、37誌中（参加50団体）ベスト6に選出されました。

「SEF（Student Freepaper Forum）」は大学生が中心となって運営されている団体で、日本最大級の学生フリーペーパーの祭典を年1回開催しています。この祭典では、全国から集まった大学生が自ら制作した雑誌を出展、交流します。それに際してコンテストが実施され、「MEJImag」は1次審査を通過。他に選ばれた5誌とともに、2019年12月8日（日）、会場となった神保町テラススクエアで最終審査のプレゼンテーションを行いました。

惜しくもグランプリ賞は逃しましたが、一次審査を通過した際、一人の審査員から次のようなコメントを頂きました。

「読み物としてちゃんとしているのは『MEJImag』だなと思いました。なんかオシャレとか今どきだとかそういうわけじゃないんですけど、普通に読みやすいし、すごくしっかりしているなと思いました」

MEJImage Vol.4 表紙

「MEJImag」の編集長・山崎友利花さん（メディア表現学科4年）は、次のように話しています。

「当日は最終審査のプレゼンテーションがあり、豪華な審査員の方やお客さんの前でプレゼンテーションするのはとても緊張しました。「MEJImag」や「目白大学新聞」の魅力を知らない人たちに向けて話すことがとても難しかったです。ですが、たくさんの方から「プレゼンテーション見ました！」と直接言われ、フリーペーパーも好評だったので、とても嬉しかったです。各地から集まった同じ世代の人たちと、フリーペーパーについて話す機会もあり、とても刺激を受け、いい経験になりました」

山崎編集長が最終審査で審査委員からの質問に答える

学生コメント

今回「日本タウン誌・フリーペーパー大賞2018」で賞を頂いた「MEJImag」はネタ集め、取材、アポイントなど担当学年のクラス生全員で一から記事を制作しました。制作期間はとにかく締め切りまで

山崎 友利花さん

に、与えられた一つの工程をこなすことを第一とし、意味合いなどが変わってしまわないように記事を書くことに気をつけました。一人一人が各自に振り分けられた記事を最後まで担当するため、一つの記事に対する責任も大きく大変でしたが、その分出来上がった記事に自分の名前が入ると、とても嬉しい気持ちになりました。

今回の「MEJImag」作成を通して、アポイントを取ることや一から記事を作ることの大変さを改めて感じましたが、その分出来上がった記事をたくさんの人に見てもらえるという何ものにも変え難い喜びを実感することができました。

私たちの所属する三上クラスは、自分たちの持ち寄ったネタを記事にすることが出来るという、とても専門的でやりがいを感じるクラスです。

今回の「MEJImag」作成をはじめとした、三上クラスでの活動は将来に役立つ大きな経験だと思います。これからもその経験を生かし、下の学年のクラス生にも繋いでいけたらと思います。

動画はこちら

めじアニメチーム３位入賞

ASIAGRAPH Reallusion Award 2018 日本予選会でめじアニメチームが 3D 部門で３位入賞

鷲谷 クラス

チーム SAT が制作した作品「Battle Cry」の１シーン

「ＣＧアニメを思い切り作りたい」という想いを持った学生が集結した自主学習グループ「めじアニメ」。今回、２０１８年５月25日（金）～27日（日）にかけて開催されたASIAGRAPH Reallusion Award 2018 の日本予選会（東京会場）の３Ｄ部門に、「めじアニメ」からは２チームが出場し、そのうち、社会学部メディア表現学科の３年生、鈴木渉さん、阿部竜也さん、田中貴大さんによる「チームＳＡＴ」が、３位入賞を果たしました。

ASIAGRAPH Reallusion Award は、大学・専門学校に通う学生が、48時間で３Ｄアニメーション作品を完成させて競い合う、国際的なコンテストです。日本予選会からは上位２チームが台湾で開催される本選に出場できるというこのコンテスト。めじアニメは前年も同コンテストに参加しており、２年連続の出場でした。

主催者・Christopher Chen 氏による開会式挨拶の様子

コンテスト当日に課題が発表されるため、どのような課題が発表されても対応できるよう、学生は素材集めや機器の設定などの準備を進め、やる気と緊張を胸に本番に臨みました。日本予選会には東京会場・名古屋会場合わせて全17チームが参加しました。東京会場で当日発表されたテーマは「涙」。各チーム48時間という非常に限られた時間の中で、アイデアを練り、絵コンテを描き、寝る間も惜しんで作品を制作。めじアニメはチーム一丸となり、余裕あるペースで作品を完成させました。

チーム SAT が制作した作品「Battle Cry」の１シーン

審査結果が発表されるのは予選会から数週間後。学生は首を長くして結果発表の日を待ちました。そして、迎えた結果発表の日。なんと、チームＳＡＴは３位入賞を果たし、東京会場、さらには出場大学の中では１位という好成績を収めました。その健闘ぶりがたたえられ、スポンサー賞を獲得。今回、惜しくも本選出場権は逃しましたが、参加した学生は、「あと一歩、決勝進出に届かなかったのが残念です（鈴木さん）」「全力で制作に取り組んだので、良い経験になりました（阿部さん）」「もし、次回出られたら、次こそは台湾（本選）を目指したいです（田中さん）」と、充実感に溢れたコメントを寄せてくれました。

チーム SAT が制作した作品「Battle Cry」の１シーン

東京会場の閉会式にて記念撮影中のめじアニメメンバー
（前列・左から遠藤友規さん、阿部竜也さん、
鈴木渉さん、田中貴大さん）

鈴木 渉さん

学生コメント

今のクラスに入ったのは、クラスを決める時に最もその先生の授業を受けていたので、知っている先生のところで活動することが安心できるなという理由からです。そのような考えで選択することもひとつの手かなということでそうしました。

ＣＧアニメに興味を持ったきっかけは、どちらかというと大会を通じてです。また、出場を決めた理由は先生から紹介があり、面白そうだな、経験してみたいという気持ちがあり出場しました。

大会のお題として前回は「記憶」で今回が「涙」だったのですが、二つを比べてみると涙の方がイメージすることが難しかったのです。どう調理してみようかとワクワクしました。

大会については、三人でどうするかを決めておいて本番にお題を知ってから前もって作っておいたシーン一つ一つを当てはめていき、このシーンはこの人物が必要でこのシーンはこの背景が必要だというように考えながら映像を作っていきました。また、三人の得意分野がそれぞれ違い私は作るのが好きだったので背景を作り、ひとりがコメディ調な動きが得意だったので人物を作り、もうひとりは映像編集が得意だったのでその方は音声や最後のまとめを担当しました。

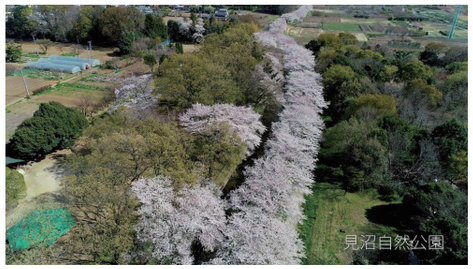
今回の大会で実力は出し切れました。また、前回の失敗点を踏まえて前よりもいい作品が作れたことが良かったです。しかし本戦に出れなかったことが悔しかったです。

また、賞を取れたことが嬉しかったことのひとつです。前回のリベンジということで参加したため、前回より良い成績が残せて良かったです。

動画はこちら

ドローンを使った桜回廊のPV映像

メディア学科西尾クラスとさいたま市の共同制作・ドローンを使った
見沼田んぼの桜回廊のPV映像



西尾 クラス

西尾典洋クラスとさいたま市が共同で、見沼田んぼの桜回廊をドローンで撮影し、PV映像を制作しました。

見沼田んぼの桜回廊は、さいたま市見沼区を流れる見沼代用水沿いに全長20km以上続く桜並木で、桜の下を歩けるものとしては日本一の長さを誇ります。

今回、その桜回廊をドローンで撮影するにあたり、西尾クラスの学生たちは2019年2月から自主的にドローン操縦の練習をスタート。同年3月に現地でよく演習を行い、桜が見頃を迎えた4月2日、5日の2日間にわたり撮影本番に臨みました。

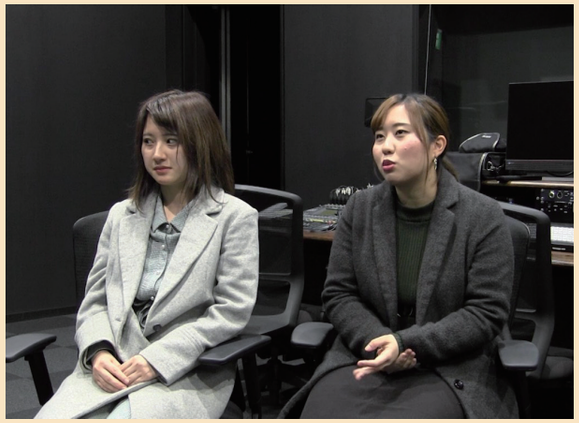
ドローンで撮影し制作したPV映像について、5月28日（火）にそのショートVer.の公開をお知らせしましたが、このたびロングVer.が公開されました。

制作した動画は、さいたま市公式動画チャンネル「さいたまチャンネル」で公開されているほか、さいたま市のSNSやデジタルサイネージ、公共施設などで投稿・放映されました。また、西尾クラスが制作する番組「めじTV」でも、今回の動画プロジェクトの制作過程をお届けしました。皆さまぜひご覧ください。

学生コメント

もともとテレビの番組を作りたいと思っていたのですが、専門の授業が少く、将来番組を作る業界に入っていけるのだろうかという事を不安に感じていたので、映像制作を行うクラスで将来を確かめたくてこのクラスに入りました。

西尾クラスは、めじTVという奈良県のケーブルテレビで放送されている番組を作ることが主な活動です。みんなでひとつのものを作るという面白さがあります。チームワークが生まれて楽しいです。一緒に協力して何かを作るという面が面白いところです。



阿部 広奈さん（左）・村上 優美さん（右）

ドローン撮影をすることは初めての経験だったのでとにかく練習しましょうというのがあり、第一体育館と第二体育館を使って飛ばす練習をしました。また、ドローン撮影は10時間の練習時間を確保しないと外で飛ばすことができないので、必死になって頑張りました。本番では、先生に画角や構図のアドバイスを頂き、とても勉強になりました。

また、ちょっとでもレバーを前にすると凄く勢いよく飛んでいってしまうので、かなり神経を使って飛ばさないといけない所が、ドローン操作の難しい点でした。

ドローンを使って撮影するということは前から興味がありました。そして、桜を真上から撮影できることは貴重なことだと思うので、実際に撮影できて嬉しかったです。

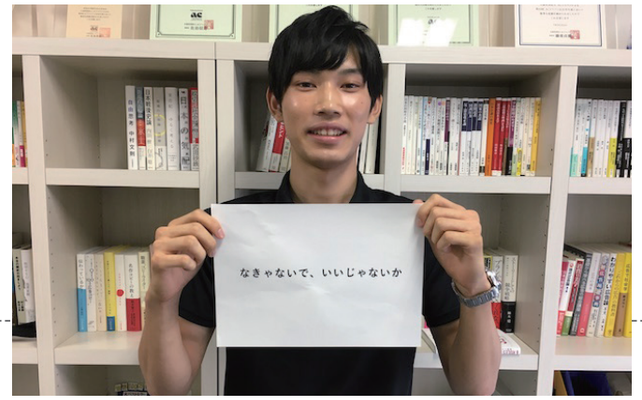
また、就活の時にドローン撮影についてお話しした時に「ドローンやったんだ！すごいね！」と映像を見ながら面接官の方からお褒めの言葉をいただけたことも嬉しかったです。

動画はこちら

ピンクリボンデザイン大賞のコピー部門

「第 15 回ピンクリボンデザイン大賞」のコピー部門でファイナリストに選ばれました！

石川 クラス



2019年10月1日（火）に発表された「第15回ピンクリボンデザイン大賞」で、石川透クラスに所属する社会学部メディア表現学科の学生がコピー部門のファイナリストに選ばれました。

ピンクリボンは、乳がんの正しい知識を広め、乳がん検診の早期受診を推進することなどを目的として行われている世界規模の啓発キャンペーンです。

石川クラス3年生の活動では、この運動の一環として行われている「第15回ピンクリボンデザイン大賞」に作品を応募していましたが、このたび森田大輔さんがコピー部門でファイナリストに入りました。

乳がんは、日本人女性の11人にひとりがかかると言われていますが、早期であれば90％以上が治る病気です。ただ、日本の乳がん検診受診率は先進国の中でも低いレベルにあり、年々死亡率が増加傾向にあります。早期発見のために検診を受けることが何より必要です。

今回応募した森田さんの作品は、「なきゃないで、いいじゃないか」。

自分はきっと大丈夫、まだ検診に行かなくたっていい、と思っている人たちに、検診の結果乳がんが「ない」ことがわかれば安心は大きい。安心を発見するためにも検診へ行きましょう。そんなメッセージを若者らしいリアルな言葉で訴えました。

コピー部門にはプロ、アマ問わず1万7886点の応募があり、森田さんの作品は、グランプリ1点、優秀賞2点、入選2点に次ぎ、最終審査に残った12点のうちのひとつです。石川クラスでは、今後も社会の課題に言葉やアイデアでできることにチャレンジしていきます。

第15回　ピンクリボンデザイン大賞について

ピンクリボンのメッセージを伝える効果的なツールはないだろうか…

そんな思いからスタートしたのが、ピンクリボンデザイン大賞です。

乳がんの正しい知識や早期発見の大切さを伝え、検診の受診を呼びかけるポスターデザインやコピーを公募して、グランプリ作品を実際にポスターにして、検診機関や病院に掲示したり、デジタルサイネージを含む交通広告や雑誌広告として活用したりしています。

毎年、プロ、アマを問わず、全国からたくさんの作品が寄せられています。

15回目の昨年、応募総数はポスター部門919点、コピー部門17886点と2018年を大きく上回りました。

※ピンクリボンフェスティバルから引用
http://www.pinkribbonfestival.jp/

なきゃないで、いいじゃないか

学生コメント

ピンクリボンデザイン大賞に応募したのは、石川先生の提案でした。

私たちのクラスは広告系なので、一年を通して何かしらの広告系、例えばキャッチコピーとかACの学生のCMコンテストとかそういったものを積極的に応募していこうということだったので、今回応募しました。

ピンクリボンデザイン大賞で一番大変だったことは、僕は男性なので女性が抱える乳がんに対する印象というのがなかなか掴めなかったんです。

ですから、僕の女友達とか家族にも乳がんをどう思ってるか聞いたりとか、今だとTwitterとかでも乳がんって調べたら色々出てくるので、それで検索してみたりもしました。

森田 大輔さん

検索していくなかで面倒くさいとか色々あったんですけど、僕が焦点を当てることにしたのが怖いという印象です。

もし乳がん検診で乳がんが見つかってしまったら怖いというのが、女性が乳がん検診を受診するのが少ない理由なんじゃないかと思い、検診に行きやすくなるようにコピーを考えました。

今回のピンクリボンデザイン大賞に取り組んでよかったと思えたのは、乳がんに対する理解がより深まったということです。

乳がん検診の受診率は年々上昇していて、日本だと2016年では女性は44.6％の人が受診しています。

ですが、アメリカでは女性は約80％の人が受診していて、日本の乳がん検診の受診率が低いということ。

あと、日本の女性は12人に一人がかかると言われていて意外に多いんです。

また、早期発見すれば再発もあまりせず、乳房を切除せずに治療することが可能ということなど、全体的に乳がんに対する知識を得られたことがよかったと思います。

今後は身の回りの女性に伝えていくことで受診率を上げられればなと思います。

動画はこちら

ロボット・ペッパーと落語のコラボ

「感情を持った」パーソナルロボットには愛着が湧きやすい

平山クラス

ペッパーによる落語

平山クラスでは2019年6月22日、高齢者福祉施設神楽坂の地域交流スペースで「ペッパー落語とドローンの操縦体験会」を主催した。ロボットのペッパーが落語をはなし、当日は小さい子からお年寄りまで、たくさんの人を楽しませました。

ペッパーと落語までの経緯

以前、ジャニーズのアイドルグループKis-My-Ft2がペッパーを用いてファンと交流したり、ダンスや演奏を行うというイベントがあったが、それをクラス活動でもできないかと、学生からの提案があった。アイドルを呼び同じようなイベントを開催することは難しいが、毎年学園祭で行なっているお笑いライブならコラボレーションが可能ではないかと考えた。ちょうどそのとき、学区内で今回の交流スペースでのイベントを募集していて、お年寄りが多いことを踏まえて落語に決まった。当日は早稲田大学・落語研究会のメンバーと、ペッパーが交互に落語を披露した。

インタビューに答える平山先生

平山先生は「ペッパーの競演には当初、プロの噺家に来ていただく構想もありました。しかし、限られた予算と日程の調整に頭を悩ませていたところ、早稲田大学の落研に協力してもらうことを思いつきました」と語る。企画の趣旨を説明したところ、参加を快諾してもらえたという。

落語をプログラミングする

ペッパーの動作と発語、そのスピード、音の高低、間の取り方など、これらすべてはプログラミングされている。今回の落語は、学生が一からプログラミングを行った。落語独特の抑揚やタメを調節しながら話を組み立てていったそうだ。しかし、表現できる幅には限りがあり何でもできるわけではない。ロボットが人間と、まったく同じように感情表現をすることは、まだ難しいという。

司会を務める学生

メディア学科にはプログラミングを行う授業がある

プログラミング作業自体は意外と難しくはないそうだ。平山クラスではペッパーのプログラミングワークショップを開催し、学生が子供たちにプログラミングを教えている。平山先生はITを使うことは特別なことではないということをみんなに伝えていきたいと語った。

ITについて平山クラスの取り組み

今後ペッパーを使って達成したい目標を伺った。

「平山クラスの目的はITを役立てることで、ペッパーだけがクラスの目的ではないが、とくにペッパーに限って言えば、一つはペッパーのような人型のロボットは愛着が沸きやすいので、そういった部分を役立てていきたい」

「二つ目は感情のないロボットだからこそ、できることがあるのではないかと思っている。例えば、将来的には介護などの面で役立てていけるのではないか」

と考えられているそうだ。

注：本活動は、ソフトバンクロボティクスのペッパーを活用し目白大学平山クラスが独自に実施しています。

「ペッパー落語と
ドローン操縦体験会」ポスター

学生コメント

堀内 葉樹さん

平山クラスでは基本的に好きなことをやって良いと言われています。何かやりたいことがあれば企画書を先生に提出し、許可をもらいます。具体的には、私たちは「ペッパー落語会」を行い、他の人は神楽坂にある商店街をインタビューしてホームページやマップを作成していました。

また、平山先生はもともとプログラミングを教えていたのでそれに関することを行なっている人もいました。私は平山クラスに入ってよかったと感じることは、好きなことをやらせてくれるというところです。他のクラスは割と決められたものをやるところが多いです。平山クラスは本当に自分のやりたいことをやらせてもらえるのでとても自由です。

私たちが行なった「ペッパー落語会」は、割とスムーズに事を運ぶことができました。唯一うまく出来なかったと思うことは宣伝です。「ペッパー落語会」は高齢者施設で行ない、そこの施設にいる人たちは参加してくれました。しかし、それ以外の一般の方や若者に全然宣伝することができませんでした。なので、人を集めることに苦労しました。今回この企画をやり終えて得たことは、宣伝や広告の大切さです。「ペッパー落語会」を宣伝するに当たりSNSや大学のTwitterすらも駆使していませんでした。宣伝するためには、SNSなどを利用して、もっと多くの人に知らせなくてはいけないなと思いました。

自分で何かやりたいプロジェクトがある人はぜひ平山クラスに入って欲しいです。

動画はこちら

聖地巡礼インターン

メディア表現学科とメディア学科の学生が岐阜県の飛騨市観光協会で「聖地巡礼インターン」を行いました。

ポスターセッション会場の様子（茨城ステージ）

インターンシップ

２０１９年８月26日（月）から８月30日（金）にかけて、社会学部メディア表現学科の３年生９名とメディア学部メディア学科の２年生４名の計13名が、岐阜県の飛騨市観光協会で「聖地巡礼インターン」を行いました。

東京都新宿区と岐阜県飛騨市は、ともに映画『君の名は。』の舞台になったという共通点があります。学生たちは４泊５日で飛騨市にある古民家に寝泊まりしながら、飛騨市観光協会から提示された「映画のイメージ以外の場所で聖地巡礼者が必ず写真を撮りたくなる※バズるフォトスポット作り」というテーマに三つのグループに分かれて挑みました。

成果発表会の様子

学生は、映画『君の名は。』にも登場する飛騨古川駅や気多若宮神社、組みひも体験のできる飛騨古川さくら物産館、１０００匹のコイが泳ぐ瀬戸川と風情ある白壁土蔵街、飛騨古川まつり会館、飛騨の匠文化館、伝統ある酒造店・和ろうそく店やしゃれたカフェなどを巡りながらトータル60カ所のフォトスポットを考案しました。

最終日の８月30日には、飛騨市役所で成果発表会を開催し、飛騨市役所や飛騨市観光協会の方々を前に、

◎コイが泳ぐ瀬戸川は手で作ったハートの中にコイを入れて撮影することで恋愛成就の場所として話題にできること

◎朱色の橋の上で桜と夕日を一緒に撮影できる今宮橋では夜桜も美しいことをＰＲすることで宿泊の需要も見込めること

◎元号が発表されたときの「令和」の文字を飛騨市出身の書家が書いたことからそれを生かすフォトスポットを作れば話題になること

などを発表し、若者の感性あふれるユニークな提案は好評を博しました。

インターンに参加した学生の感想の一部をご紹介します。

◎想像以上に楽しかった。

◎５日間滞在しないとわからない地域の魅力を発見できた。

◎成果発表会を終えたときに達成感があった。

◎アイデアを考えるのが好きな自分に適したインターンだった。

◎５日間の内容がとても濃く、毎日新たな発見があった。

◎思っていたよりも大変なインターンであったが、スキルが身につく貴重な経験になった。

◎グループで課題を解決するという経験値が増えた。

◎さまざまな点で困難があったが、一つずつみんなと協力しながら乗り越えることができ成長できた。

なお、この「聖地巡礼インターン」は中日新聞・岐阜新聞に記事が掲載され、ＮＨＫの岐阜県のニュースでも取り上げていただきました。

※バズる：主にＳＮＳなどのインターネット上で話題になり多くの人の注目を得ること。英語の動詞 buzz が語源。

瀬戸川と白壁土蔵街

飛騨古川駅前のロータリー

飛騨古川まつり会館

浴衣で打ち合わせ

成果発表会後の集合写真

グループワーク

学生コメント

手島 佳奈さん

私が聖地巡礼インターンに興味を持ったのは、旅行や観光が好きだからです。普段の旅行は1泊2日で終わってしまうことが多く、5日間同じ場所にいるという経験がなかったので、何か新しい発見があるのではないかと思い、このインターンに参加しました。

私自身、インターンに参加するのは今回で2回目です。以前参加したものは個人作業が中心でしたが、今回のインターンはグループで企画を考え、発表するものでした。グループのメンバーが全員先輩だったため、緊張した部分もありましたが、私の出した意見を否定せず聞いてくれる人ばかりだったので安心しました。若者が飛騨市に足を運んでくれるようなフォトスポットの企画を20個提案し、宣伝方法まで考えるのは非常に大変でしたが、私が出した案をほかの人が広げてくれたり、逆にほかの人が出した案を私が広げることができたりしたときの達成感は、グループ作業だからこそ得られたものだと思います。今まで味わったことのない達成感を得られたことは、よい経験になりました。

動画はこちら

イベント業界インターン

メディア表現学科の「イベント業界インターン」が開始！

インターンシップ

全員で記念撮影

社会学部メディア表現学科の3年生13名による臨地研修※「イベント業界インターン」がスタートしました。株式会社映像センター、東京芸術劇場での臨地研修の様子をご紹介します。今回の記事は岡星竜美先生が作成したものです。

※臨地研修：インターンシップ。学生が一定期間実際の企業・団体で就業体験を行う制度。

「イベント業界インターン」とは

「イベント業界インターン」の受け入れ先は、一般社団法人日本イベント協会（JEVA）です。本学と同協会とは包括連携協定を締結（2017年3月）している関係から、協会の会員である企業や団体を訪ねたり、イベント現場に参加したりするプログラムに参加したりして様々な体験をしました。

オフィス外観（写真左）と特別講習会（写真右）

株式会社映像センターバックヤードツアー

2019年7月14日（日）、大手映像企業である（株）映像センターが、本学の学生のためだけに特別講習を実施してくださいました。

学生たちは、初めてのイベント企業訪問にわくわくどきどき・・・。りんかい線・東雲（しのめ）駅から徒歩5分、臨海地帯に巨大な倉庫が出現！ここが映像センターが誇る東雲（しのめ）オフィスです。日曜日でしたが、10名もの社員の皆さまに明るく迎えていただき、特別講習～倉庫見学～最新機材デモなどを行っていただきました。

学生たちは、「夏フェス」に観客として参加することはあっても、制作するプロの人に会ったことはなかったので、ステージ映像を担当している若い社員の方の話には大いに興味を持ったようでした。

倉庫内バックヤードツアー

東京芸術劇場バックステージツアー

2019年7月22日（月）の休館日、東京芸術劇場が本学の学生のためだけにバックステージツアーを特別に実施してくださいました。

東京芸術劇場は、東京都が誇る、コンサート、ミュージカル、ストレートプレイ等を上演する複合芸術劇場です。舞台管理担当の方のガイドで、まずは2000名収容の大ホール（コンサートホール）を見学しました。前面にそびえ立つ巨大なパイプオルガンに、学生たちは息を飲んでいました。

続いて、中ホール、800名程度収容のプレイハウスへ。主にミュージカルを上演している人気の高い劇場です。

小ホール2つ、シアターEAST・WESTと巡り、劇場の構造や仕掛けについて、詳しくご説明いただきました。最後の質疑応答タイムでは、学生たちから積極的に質問が出ていました。

2つのインターンを通して、フェス等のライブ映像の提供、劇場管理によりコンテンツ（コンサートやミュージカル）制作を支えるプロの仕事に、学生たちにとって多くの気づきがあったことと思います。

東京芸術劇場の外観（写真左）と大ホールのステージ上の見学（写真右）

中ホール見学（写真左）と質疑応答（写真右）

大ホール2階席からの見学。

学生コメント

岡星クラスでは主にイベント学について研究をしています。そして、クラス活動の中の1つとしてイベントインターンという活動があります。

岡星クラスでのイベントインターンは、岡星先生の関係者などから繋がりのあるいくつかのイベントインターンを、学生が一日から二日間実際に体験しに行くというものです。インターンの具体的な企業名やイベント名はここでは書くことはできませんが、大手企業のイベントで実際に客を誘導したり運営の人の近くについてイベントの流れを見たり、イベント業界の現状を間近で体験することが出来ます。実際にイベントインターンに参加して、どんな人達がどのように関わり合ってイベントを作り上げているのかを裏方から見ることができて学ぶことがたくさんありました。具体的には、イベント業界にはイベントの仕事を楽しんでやっている人が多いという事や、1つのイベントができるまでにどのような人達がどのように関わり合っているのかなどを知る事ができました。

イベントインターンは、現場に行かなければ学ぶ事ができなかったイベントの色々な事を学ぶ事ができる、とてもいい活動です。

城山 萌香さん

動画はこちら

新型コロナで変わったこと

目白大学メディア学部　各クラスからのメッセージ

「学びを止めるな！」新型イベントクラスの挑戦

岡星クラス

大ヒット映画タイトルから少し借用した言葉です。大学という「学ぶことが仕事」の時期を一切無駄にしてほしくないと、こんなクラステーマを掲げました。このような状況にあっても、学生は〝学びを止めてはいけない〟、教員は〝学ばせることを止めてはいけない〟との思いからです。

岡星クラスはイベントを学ぶクラスです。イベントは、今一番自粛しなくてはならない「3密」なものの一つです。ですが、イベント業界も次々と新しいアイデア、新しい施策でイベントを実行し始めました。それが、「バーチャルライブ」や「オンライン握手会」、「ドライブインお化け屋敷」などの試みです。

イベントやメディア業界に船出するのであれば、それ相応の技術や道具が必要です。クラスでは、イベントスキル（技術）として「イベント7つ道具」①企画書　②進行台本　③運営マニュアル　④工程表（制作スケジュール）　⑤見積書　⑥図面　⑦実施報告書の具体的な作り方を身に付けていきました。

最後に、〝新型イベント〟のアイデアを生み出すワークショップを行いました。

新型コロナウイルスは、人間が最も人間らしい営み、そして最も文化的な楽しみを奪いました。「集うな！」「交流するな！」「感動しあうな！」・・・人と人を分断するということは、つまりは、イベント業界へ挑戦状を突き付けてきたようなものです。この挑戦に勝つためには、新しい挑戦が必要です。

それを、次代の人材に期待します。

オンラインだからできること

牛山クラス

牛山クラスでは、3月末からＺｏｏｍを使って様々な活動を進めてきました。

4年のクラス活動では、近況報告、書籍『論文の教室』の輪読、卒業研究の進捗状況の報告・共有を中心に行っています。近況報告では、オンライン面接での体験や就職活動中の悩みなどを共有することで、お互いに励まし合っています。

3年のクラス活動では、昨年度から企業と連携して進めてきた新商品開発プロジェクトについて、オンラインでその成果を発表しました。オンラインでプレゼンを行うのは、クラス生全員初めての経験でしたが、クラス時間以外にもＺｏｏｍで会議を重ね、万全の態勢で臨んだことで、企業からも高評価をいただき、学生の提案が実際に採用されることとなりました。現在は、オンラインツールを使って、秋から行うクラス情報発信プロジェクトの企画会議を行っています。

3年のクラス活動の一コマ。Zoom でも笑顔が絶えないクラス活動です。

現時点では、遠方への取材や企業訪問が難しい情勢ですが、「オンラインだからこそできることがある」と前向きに捉え、福岡・横浜・東京の企業経営者とのディスカッション、専門家による自己ＰＲ動画の制作講座、これからの観光のあり方について専門家を交えたディスカッションなど、外部と連携した取り組みも実施しています。秋には、他大学との合同クラスも行う予定です。

ＷｏｒｄＰｒｅｓｓの操作の学習

皆川クラス

皆川クラス3年生は、Ｚｏｏｍを利用して遠隔によるクラス活動を行いました。

新型コロナウイルスの影響で外出などが制限されているため、実際に学外での活動を行うことができませんでしたが、社会連携プログラムに向けた前段階として、Ｗｅｂサイト構築や管理運用のスキルおよび知識を身に付ける学習を中心として活動を行いました。

具体的には、自宅から各自のノートＰＣを利用して、共通のクラスのＷｅｂサーバにアクセスし、各自でＷｏｒｄＰｒｅｓｓをインストールして基本操作を身に付けることからはじめ、実際にＷｅｂサーバの構築を依頼された場合の、課題整理・企画立案・仕様策定・設計までの手順やポイントなど、ひととおりのながれを学習しました。

さらに、ＷｏｒｄＰｒｅｓｓの基本操作だけではなく、ソースレベルでシステムをカスタマイズできるようＷｏｒｄＰｒｅｓｓなどで利用されるプログラミング言語（ＰＨＰ）を学習しました。

これからの社会連携プログラムにおいて、クラス活動をとおして身に付けた力を発揮しながら活躍できる日を迎えることを期待しています。

2つの取り組みを実施

溝尻クラス

溝尻クラスでは、この春学期、大きく2つの活動に取り組みました。

1つ目は、春休みから始めたインタビュー論文の

作成です。

これは卒業論文の予行演習として行なっている「ファン文化のフィールドワーク」プロジェクトの1つです。ジャニーズファンや2.5次元ミュージカルのファン、コスプレイヤーなどさまざまなコンテンツのファンに、ファンになったきっかけや、ファンとして考えていることなどを聞き取り、短い論文にまとめました。これらを通して、学生たちはインタビュー調査の方法や、その成果を論文としてまとめるプロセスについて学びました。

リモート講義のZoom画面

2つ目は、春学期後半から秋学期にかけて実施するプロジェクトの企画立案です。

溝尻クラスでは例年、大学外でフィールドワークを実施し、その成果を雑誌や映像などにまとめて広く発信する活動を行なっていましたが、今年度はそれが不可能になってしまい、大変苦しい状況で企画を考えざるを得ませんでした。複数回にわたる話し合いを経て、自分たちがこの外出自粛期間中に経験してきたことを記事化し、「いま、東京の大学生はどんなことを考えながら日々を過ごしているか」を広く発信していく雑誌を制作することになりました。

コーナー編成やページレイアウトなどをゼロから考え、夏休み以降は、いよいよ記事の執筆を始めていきます。完成した雑誌はWebで公開する他、秋学期の後半に予定している他大学クラスとの合同発表会で披露する予定です。

ダンスとゲームサイト「めじキッズ」

原クラス

原クラスでは、トレードフェアに出展するコンテンツの開発とWebサイトの運営計画を進めています。トレードフェアは毎年京都大学で行われ、全国から集まった小学生から大学生のチームが取り組むプロジェクトで開発された商品やサービスを展示・販売するイベントです。今回は新型コロナウイルスの影響のため、オンラインによる11月末の開催になり、春学期はその準備に取り組んでいます。

出展する予定のサービスは、小学生向けのWebサイト「めじキッズ」をオープンし、新型コロナウイルスによる外出自粛期間中でも家でゲームやダンスをして体を動かすなど、一緒に楽しみながら過ごせるコンテンツの提供を予定しています。現在、Webサイトチーム、ゲームチーム、ダンスチームの3つに分かれて制作進行中です。

Webサイトチームは、漢字に振り仮名を付けたり、小学生らしいデザインにしたりするなど、子どもに見やすく分かりやすいサイトを工夫しながら制作中です。

ゲームチームは、プログラミングソフト「スクラッチ」を使ってゲーム制作を進め、パソコンやスマホのカメラを使って家の中で体を動かしながら楽しめるシリーズを鋭意制作中です。障害物を避けるゲームを制作し、2作目のゲームに現在取り組んでいます。

ダンスチームは、子どもに分かりやすい振付を教える1本目の動画制作を進めていますが、編集作業など慣れないことで苦労しています。SNS上での公開も考えています。

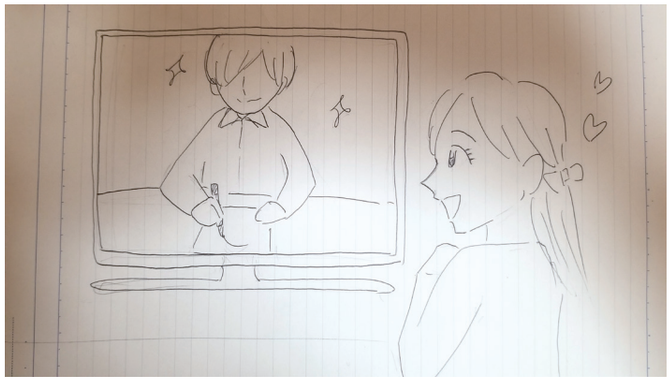
「めじキッズ」は10月上旬公開予定。

どんなときもアイデアは生み出せる

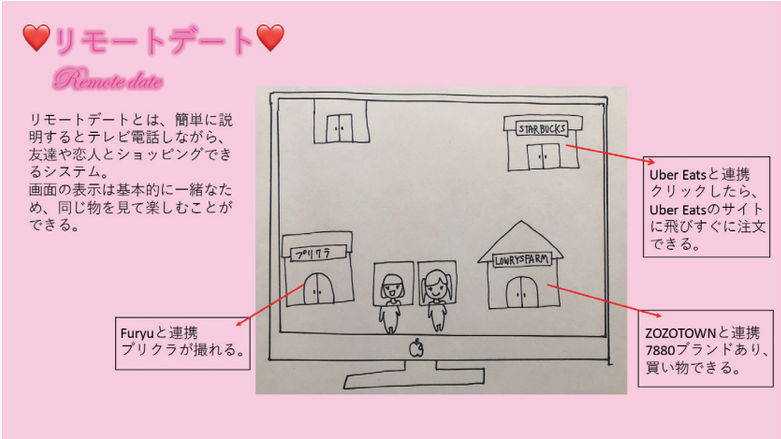
石川クラス　3年　一条旭夏

私たちは、コロナ禍で人とのつながりの価値を改めて考えさせられました。そうした中で今だからこそできるコミュニケーション活動をそれぞれ考え、発表しました。アバターを使ってバーチャルデートができるサイトや、プロ野球開幕が危ぶまれていた中、選手たちが野球ゲームで勝負し、それを生配信するといったオリジナルな企画が多く生まれました。その一つに「オンラインでアイドルがサイン会をする」というものがあったのですが、今現在いくつものグループが実際にオンラインサイン会を実施しています！（企画時5月）社会をよりよくするためにアイデアを生み出していくことに貪欲でいたいと思いました。

つぎにピンクリボンデザイン大賞へ作品を応募しました。このコンペは乳がんの正しい知識、乳がんを自分の問題として意識することの大切さを伝えるために毎年開催されています。まずは私たちが乳がんについて知ろうということで、それぞれが持ち寄った乳がんについての知識や経験を教え合いました。それから、各々キャッチコピーの制作に取り組み、石川先生からアドバイスをもらいながらブラッシュアップしていきました。コピー部門の他にポスター部門にも4組が応募し、結果を待っています。この活動により、一人でも多くの方が検診に足を運んでくれると嬉しいです。



リモートデータの絵コンテ



リモートデータの絵コンテ

コロナ禍におけるクラス活動について

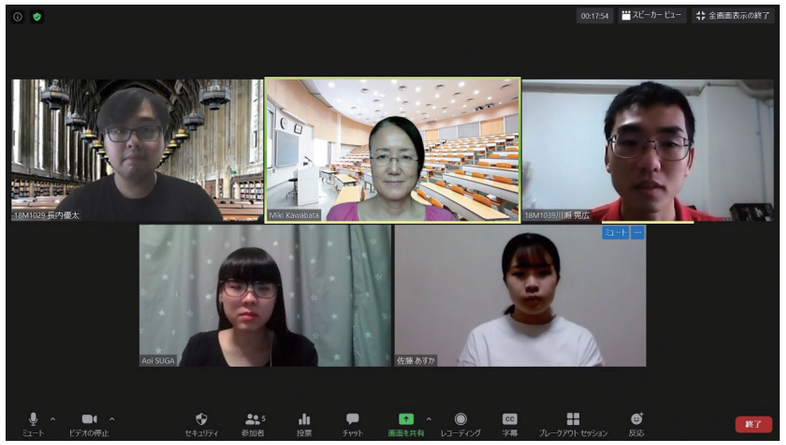
川端クラス

3年次川端クラスは全4名の小所帯である。しかし、小さいながらもやる気のある男女2名ずつで活発なクラス活動を行っている。残念ながら今年の春学期はまだ対面授業は行えていないが、Zoomで顔を合わせながら、これまで3か月余り、さまざまな活動を行ってきた。

まず、毎回最初にアイスブレイクを行った後、本題に入る。アイスブレイクとして、最近は、1つずつ質問をしてその答えから出題者が考えていることを当てる推理クイズを行っている。これでチームワークや相互理解の他、推理能力や論理的理解力を育んでいる。

本題としては、毎回だいたい2つの内容を授業内で実施している。これまでに行ったことは、一つは昨年度始まった理研ビタミン（株）との社会連携で、ノンオイルドレッシングの調査に関する分析や報告書の執筆を皆のアイディアで進めている。昨年度の終わりに大学でSPSSという統計ソフトを使って途中まで結果を分析していたが、追加分析や発表の機会が新型コロナの感染拡大により中断しているため、現在は皆で議論をしながら報告書の仕上げを試みている。完成後は、遠隔であっても企業の方を含めて報告会が出来ればと考えている。もう一つの内容としては、毎回社会心理学の専門知識を学んでいる。ここで学んだ知識を基に、春学期の終わりから、4人チームでテレビ広告の分析などをテーマに共同プロジェクトを行う予定である。

上記の他、対外的な活動の試みとして、今年は作文コンクールなどに応募している。試作版の内容を皆で読んで批判し合い、切磋琢磨している。



Zoomによるクラス活動の様子。

オンラインで京都へ行こう！

平山クラス

こんな時でもできること、こんな時だからできること。大学の授業開始が5月11日となり、春学期は授業もクラス活動も全てオンラインで実施することになり、「どうしようか？」と4月にオンライン打ち合わせしました。その結果、「こんな時でもできること」として、みんなで協力してクラスのホームページ作りをしようということになりました。クラス活動が始まると、みんな待ちわびていた（？）のか、課題ゲームの作成、論文読みという春休みの宿題をしっかりやってきていました。「クラス活動はオンラインでもしっかりできる」と思いつつも、「もう少し何かできないか」とも思い始めました。そして、「そうだ、京都に行こう！」ということになりました。京都は環境に対する意識が高く、「環境市民」という有名な認定NPO法人があります。みんなで京都に行って、環境市民を訪問し、色々話を聞いてみようということになりました。あ、勿論、オンラインでです。写真は、オンライン訪問の際のものです。上から2段目の左から2人目が環境市民の副代表理事、下村委津子様です。なかなか普段だとできないようなことができました。そして、素晴らしいお土産も頂きました。それは、「環境市民を紹介するポスターと動画を作ってくれませんか？」というお願いでした。勿論、気持ちよくお引き受けしました。今、平山クラスでは、クラスのホームページと共に、環境市民のポスターと動画を作る日々が続いています。

Zoomによるクラス活動の様子。

コロナ禍でのクラス活動

馬場クラス

馬場クラスは映像制作を主軸としているため、外出自粛は実質的な活動を非常に厳しく制限するものでした。

現在も毎週定刻のオンラインミーティングができるだけ有意義なものになるよう、模索を続けています。

当初は6月か、遅くとも7月になれば状況は好転するだろうと楽観的に考えていました。

お勧めの書籍や映画の紹介、自宅での過ごし方を紹介する動画を制作し見せあうなどしていました。

結局、初夏に至るもなお病禍は収束せず、現在も引き続き個人の範囲で可能な映像制作課題に取り組み、スキルアップを図っています。

課題は基礎的な映像技巧から始まり、徐々に複雑高度化させています。

直近の課題から紹介すると、詩（寺山修司「海の消えた日」）を自分で朗読し映像を制作するものや、また別の詩（萩原朔太郎「静物」）を文字情報として映像中に表示する演出を考える、といったものになっています。

こうした課題を通して鍛えられた腕を振るう日が来ることを心待ちにしています。

目白大学生が見た新型コロナ　編集後記に代えて

ミャンマー人の寿司職人、ニューヨークでコロナの犠牲に
～ゼミ生の叔父がコロナで死去～

山口　崇法

私の叔父、ミャンマー人のティンアウモンは２０２０年４月16日、新型コロナウィルスのために逝去しました。惜しまれながら52歳という若さでこの世を去ったのです。直接の原因は過去に患った肺炎でした。私は叔父を失くしてから新型コロナウィルスの恐ろしさを初めて痛感しました。この病に対する自らの認識の低さと甘さを思い知らされました。

実は叔父がコロナの犠牲になったのは、祖国ミャンマーでも日本でもありません。遠いニューヨークの地でした。叔父は、25年間アメリカのニューヨークに住み、寿司職人として働いていました。叔父はミャンマー人でありながら、仕事は寿司屋の料理人でした。

ミャンマー人のティンアウモンさん、
コロナのために 2020 年 4 月に死去

アメリカに渡ったのは、妹が医療技術を学ぶためにアメリカに留学した際、妹を思いやる気持ちから自らも渡米する決心に至ったためです。ミャンマーでは治安の悪さから家族や親戚などを過度なほどに大切にする文化があり、叔父も自身の妹を大変に大事にしていました。

叔父が寿司に出会ったのは、パートのアルバイトを探している際偶然面接に合格したのが寿司屋だったからだそうです。今やアメリカには数え切れないほどの寿司屋がありますが、叔父が渡米した時もすでに多くの寿司屋が見受けられたと話していました。叔父は一度日本を旅行したことがあったそうで、その時に食べた寿司は亡くなるまで忘れられなかったそうです。

ティンアウモンさんと寿司屋の料理職人仲間

アメリカの寿司職人として、叔父は自分の仕事に誇りを持っていました。ニューヨークではコロナ禍が吹き荒れ、外出禁止令は日本よりも厳しいとはいえ、申請を出せば外出することができました。そのため叔父も外出禁止令発令中も、細心の注意を払いながら仕事のために外出をしていたそうです。それが不運に繋がったのでしょう。

叔父には息子が一人いるため、残された叔母と従兄弟は非常に辛い思いに苛まれています。しかし、今回の新型コロナウィルスの流行でこのような状況に陥った人々は計り知れないはずです。

私自身、母から叔父が亡くなったという連絡を受けた際、５分も経たずに新型コロナウィルスの危険性をＳＮＳで発信した。多くの人々が亡くなられただけでなく、経済的にも大きな被害を被っています。雇用される側はもちろん、経営者は何千万円もの赤字になり、止むなく倒産してしまった会社も多かったでしょう。とはいえ、この被害を未来の糧にすることこそが今考えるべきことではないでしょうか。

歴史的ウィルス感染に見舞われた私たちは、これからも様々な困難に立ち向かわなければならないはずです。私たちに与えられた課題は、その困難や失敗を糧に、明るい未来を作ることでしょう。叔父もそれをきっと望んでいるに違いないのです。

新型コロナウイルスによって失われた信用

味田 萌百

新型コロナウイルスの感染拡大の影響

今回の新型コロナウイルス感染拡大の影響により、私の働いているアルバイト先も大きな影響を受けた。東京には店舗が一つしかない小さい飲食店のため、会社自体も売り上げがないと営業することができない。そのため、4月から一度も営業していないが、6月まで今後の営業に関する連絡や休業補償の話はアルバイトには一切声が掛かっていなかった。しかし、今まで休業補償に関して何を質問しても「今はわからない」の一点張りだった会社から、6月中旬に突然休業補償に関する話がアルバイトに送られ、すぐに補償金が支給された。

募る不信感

無事に休業補償は支給されたが、今後の営業に関しては未だわからないままだ。3月末までは今まで通り営業していたが、4月からは上の指示により店長だけの、いわゆる「ワンオペ」の営業となった。一緒にアルバイトをしていた友人と、少しでも店長の役に立つのならばと考え、4月の初めに昼食がてら店に顔を出したが、そこにはシャッターの閉まった状態の店と、荷物を運び出している店長の姿があった。店長曰く「上からの急な指示で店を閉めることになった。荷物は全て本社に送る。」と言われた。これが今の私のアルバイト先のリアルな現状である。

学生アルバイトの社会的地位

今の時期は私と同じような状況の学生も多いだろう。会社によってはアルバイトに補償金を支払うところもあるが、社員だけが補償の対象となるという会社も多くある。私の働いていたお店は前者であったが、これは稀なケースである。新型コロナウイルスの感染拡大が落ち着き、今までのような生活が戻ったとしても、会社に対して一度感じてしまった不信感は消えることはない。また、国の定めた補償対象も、すべての会社が一度見直す必要があると考える。それで救われる学生やフリーターの人もいるかもしれない。

今後の対応と失った信用

オープニングスタッフとして採用され8ヶ月近く働き続けたこの店は、時給は１２００円で交通費も全額支給と、東京の中でも条件のいいアルバイト先であった。したがって、アルバイトを一人雇うのにもかなりの日給となるため、売り上げがないとアルバイトを雇う余裕がないのが現実だ。私の働いていた店は、この先も営業を再開することがあるかはわからない。もしそれが会社の個人的事情があるのならば、一度アルバイトに説明するのが社会の礼儀というものだと私は考える。また、今回の話のメインとなっている飲食店と同じ親会社であり、並びに店を置いている大衆居酒屋では、一時休業したものの、現在は営業時間を短縮しながら社員だけで営業している。しかし、アルバイトには営業再開についての連絡は一切ないままであった。

このように雇用している側と雇用されている側の最低限の報告の義務などについては、社会的に一度見直すべきだと私は今回のこの期間で考えた。

自粛期間　料理の世界に

横手　里南

私は外出自粛期間中に、今まであまりやってこなかった料理を始めた。

料理を始めた理由は、単に時間ができたからだ。料理は今まで全くやってこなかったわけではないが、家にいる時間が増えたことをきっかけにほぼ毎日三食の料理を作ることに挑戦できた。ゲームをやっても課題をやっても、趣味の動画編集をしていても時間が余る。要するにとても暇だったので「料理でもするか」という気持ちになったのだ。

料理をはじめたもう一つの理由は、家族のことを考えるようになったからだ。自粛が始まる前までは、自分の予定でいっぱいいっぱいで家にいる時間もなければ、自分以外の人のことを考える余裕もなかった。しかし、自粛期間中ずっと家にいたことで家族と過ごす時間が増え、家事をしている姿を間近で見るようになった。そうすると、少しでも手伝いたいという気持ちになれたのだ。

実際に作った料理

料理はなんだかんだ毎日続けられているし、YouTubeなどの料理チャンネルを参考にしながら作るのは楽しい。韓国風の唐揚げや鶏チャーシュー、クリームパスタなどは、家族からの評判もいいのでよく作っている。最近では、デミグラスソースを使ったアレンジレシピを考えたり、変わった調味料を買ってベトナム料理を作ってみたりするなど、自分で考えながらの料理にハマっている。

特に、ケーキ作りは動画を見ながら楽しく簡単に出来たので、是非試してみて欲しい。

おすすめのチーズケーキレシピ動画　https://youtu.be/jDrq8rypJMc

私が見た無観客試合

高橋　美彩紀

明治神宮球場でのアルバイト

私は高校野球が好きで、明治神宮球場でアルバイトをしている。普段のプロ野球では、アルバイトが100人以上働いて、チケットもぎりや席案内、手荷物検査など接客中心の業務を行なっている。アルバイトは学生が多いということもあり、業務中はみんなで和気あいあいとしている。30人ほどで野球観戦して遊びに行くほどアルバイト同士仲が良く、社員さんとも距離が近い。

しかし、新型コロナウイルス感染防止のため、2月26日から無観客試合となり、ほとんど仕事が減ってしまった。無観客の場合、接客をすることもないし、ゲートも3、4カ所しか開けないので、必要となるアルバイトの人数は半分以下になってしまう。なので、アルバイトの仲間とわいわいする様子もなくとても静かだ。無観客試合の間、新型コロナウイルス対策として、マスクの着用は絶対で、体温チェックシートの記入を行ない、37・5度以上の熱がある人は勤務できない決まりとなっていた。

私が観戦した神宮での高校野球

無観客試合の経験

私は無観客でのアルバイトを3回ほどしたのだが、そこで見た光景は殺風景だった。スタンドにはバックネット裏にいる報道関係者のみ。「頑張ってね」とよく話しかけてくれる常連のお客さんにも会えない。いつもの隣の人の話し声がかき消されるほどの盛り上がりと、お客さんの賑やかで活気溢れる様子がなかった。聞こえてくるのは、バットでボール打ったときの音とミットにボールが収まる音だけだった。ボールの音が聞こえてくることはなかなかないので新鮮さもあったが、やはりお客さんの盛り上がりで熱気がないのはとても寂しく感じた。一日でも早く観客を入れて元どおりになって欲しいと思った。

そして、3月20日の開幕が延期となった。アルバイトの仕事は一切なくなり、収入もゼロになってしまった。他のアルバイトのオープニングスタッフに応募してみたが雇う余裕がなく、いつお店を始めることができるかわからないということで断られてしまった。

スワローズの内野スタンドの応援風景

私は、実家暮らしなので生活費や食費にはあまり困らなかったが、学費に関しては奨学金を借りているのでとても不安に思う。学費のためにもアルバイトはやらざるを得ないが、これから就職活動も始まるので、それとどのように両立をしていくのか考えていかなければならない。

奪われたアルバイト環境

山田　優太

新型コロナウイルスの感染拡大により、都内のアルバイト先が休業要請を受けた。アルバイト先から

配達用バッグ

は休業補償として月の平均額満額と補償金が併せて支給された。

緊急事態宣言により働ける場所が限られてしまった。この空白の時間を有意義に使えるバイトはないかと探してみると「ＵｂｅｒＥａｔｓ」があった。飲食店のテイクアウトを宅配するサービスである。多くの友人がこのアルバイトをしているという現状もあり、始めるきっかけとなった。

外出自粛期間中で不要不急の外出は控えるようにとされていたため、このサービスにはとても需要があることを改めて感じた。外に出ることで自らが感染してしまうことや、気づかない間にウイルスを移してしまうのではないかという懸念もあった。しかし、宅配員とお客様との間でのやりとりは対面せずに行えるメリットがあるため、始めることにした。

このバイトを地元である埼玉で行ってみた。一件５００円前後で配達料が支給され、いつどこにいても働くことができるシステムになっている。宅配サービスを始めてみると、各飲食店で様々な対策をしていることが分かった。出入り口にアルコールが常備されている店や、商品を受け取る際に他のお客様との接触がないよう、裏口からの入店を促されるところもあった。また、配達するときには、マスクをしているか、体調が良いかなどチェック項目が設けられており、チェックしなければ始められないシステムも導入されていた。

このように店舗の取り組みを肌で感じる良い機会となった。それだけではなく、多い時では一日２５ｋｍ以上を自転車で走行するため、土地勘をつかむことができたり運動不足解消になったりした。

この配達バイトが普及する中、問題となったことが「配達バッグの転売」だ。配達バッグは大手通販サイトで誰でも入手できるため、転売が多発しているのだ。定価４０００円がフリマサイトで１万円ほどまで値上がりしていることを確認した。他にも様々な商品が転売されてきた状況をみた。誰かが苦しんでいる状況から生まれる転売は、撲滅することが難しい問題であるだろう。

宅配サービスを行うことで、企業の対策の仕方やデリバリーサービスの需要を感じたと同時に、問題点を明確に感じる体験であった。

実際に配達するときの様子

コロナで感じたエンタメの力

蒔田　志乃

コロナ禍のエンタメ界

新型コロナウイルスによってイベントやコンサート、演劇の中止が相次ぎ、エンターテインメント業界が大きな打撃を受けている。

私自身も、行く予定だったジャニーズＷＥＳＴのコンサートが中止となってしまった。そのコンサートは、３月末から５月末にかけて行う全国ツアーで、私はさいたまスーパーアリーナでの公演に行く予定だった。元々私は、ジャニーズＷＥＳＴのコンサートには基本的に毎年行っており、それ以外にも、普段から年に何回かコンサートに行っている。映像を観るだけでは感じることのできない会場の一体感やステージパフォーマンスの迫力、自分の好きなアイドルと同じ空間にいるという特別感などを味わうことができるコンサートは、私にとって、毎年最大の楽しみだった。

しかし、新型コロナウイルス、緊急事態宣言の影響から全公演中止というかたちになってしまった。それに伴って、希望者にチケット代７２００円の払い戻しが行われている。今後、公演が再開できる状況になった際に振替公演の調整に入る予定であることから、応急処置として、返金を急ぐ希望者に払い戻しを行っているのである。

自分自身が行く予定だったコンサートが中止になったことで、新型コロナの影響をより身近に感じるようになった。また、自分にとって最大の楽しみであったコンサートが中止になり、ショックを受けたが、自分の生活におけるエンタメの重要性を実感するきっかけとなった。

ジャニーズ WEST の過去のコンサートグッズ

必要不可欠なエンタメ

新型コロナによって、コンサートや演劇の中止などをはじめ、エンタメが不要不急だと捉えられるような状況にあった。しかし、私は、エンタメは不急であったとしても不要ではないと考える。実際に、外出自粛期間中に多くのタレントがインターネット上での配信を行い、それぞれ反響を集めている。私自身も、ジャニーズ事務所のタレントが行ったＹｏｕＴｕｂｅなどのオンラインライブや動画投稿に元気をもらい、自粛期間で気持ちが暗いなかでも希望を持つことができた。このように、エンタメは、夢や希望、辛いことも乗り越えようという勇気を与えてくれたり、明日への活力に繋がったりすることもある。エンタメは精神的な健康を支えるという点においても、私たちの生活に必要不可欠なものなのではないだろうか。

今回中止になったツアーのロゴ
https://www.johnnys-net.jp/page?id=consta&artist=29

コロナによって奪われた「最後」

田村　沙香

２０１９年の年末頃から徐々に広まり、今もなお界中を苦しめている新型コロナウイルス。その影響は計り知れない。　私が好きな韓国アイドルグループ、ＢＴＳ（別名：防弾少年団）は、２０２０年２月から始まる予定だったワールドツアーを全面的に延期した。今年出来ないのなら来年またやれば良いという簡単な話ではなく、その収益を見越しての投資や次のアルバム制作活動、プロジェクトなどが動いていたはずなので、大幅に計画が狂ってしまっただろう。

ライブ中止は、公演チケットや公式グッズの収益はもちろん、ライブビューイングにライブ映像を収録したブルーレイの発売など、全体で考えたら大規模な損害だ。

そして、何よりも彼らにとって１番重大な問題なのが、韓国の徴兵制度により、最年長のメンバーが今年の１２月までに兵役に行かなければならないことだ。最年長のメンバーだけが行くのか、それともメンバー全員が行くのか、それはまだ明らかになっていないが、どちらにしてもメンバー全員が揃ってライブが出来るのは今年いっぱいで、当分は最後になる。

先日、オンラインライブが開催されたが、メンバー全員が口を揃えて「ファンの歓声が聞こえないと力が湧いてこない。ファンの皆さんと会って、アイコンタクトを取りながらライブがしたい。」と語った。

韓国アイドルのライブは少し特殊で、大体の曲に掛け声がある。日本でいう合いの手のようなものだ。

曲に合わせてファンが掛け声をすることでアイドルと一体感が生まれる。やはり、オンラインとリアルでは臨場感や一体感、迫力や感動など、何から何まで比べ物にならないほど全く違う。

私が彼らのライブに行ったのは２０１８年の11月が最後で、去年の私は、まさかこんなことになるとも知らず、日程の都合が合わないのを理由に「来年行けばいいや」と行くのを諦めた。

高校1年生の時に彼らと出会い、一気に夢中になり、1人で韓国まで行ってライブに足を運んだこともあった。そして、彼らの言っていることを翻訳なしで理解したくて韓国語を必死に勉強し、彼らのおかげで出会った友人も沢山いる。彼らにまつわる思い出を挙げたら本当にキリがない。

一刻も早く新型コロナウイルスが収束し、私の「最後」が更新されることを今は願うばかりだ。

延期されたツアーの宣伝動画
https://youtu.be/FZ7P7H7HHAA

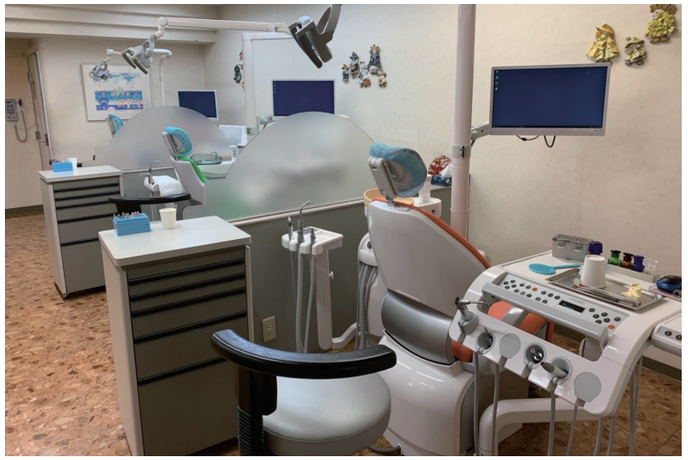
「不急の治療」は必要か！？

阿部　奈々歩

世界中で猛威を奮う新型コロナウイルス。2020年3月15日に報じられたアメリカの新聞ニューヨークタイムズ紙での記事を筆頭に、3月下旬から4月上旬にかけて「歯科医院は感染リスクが高い」という報道がいくつもなされた。この様な報道を受けて、緊急事態宣言中でも営業を続ける歯科医院には少なからず影響があったといえる。

私の母が働く、地域に根付いた小さな個人経営の歯科医院でも、新型コロナウイルス感染拡大に伴って環境が大きく変化した。院内の消毒、殺菌を徹底して行うことは勿論のこと、歯科医、衛生士全員がマスク、ゴーグル、フェイスシールドを着用した上で営業している。

患者も通院の際、検温結果や家族の感染状況などを歯科医院に報告したり、手指は勿論のこと口内の殺菌消毒を行ったりする。このようにして、衛生面にも細心の注意を払って治療を進める。



母が働く歯科医院

「私が働いている歯科医院での治療は“急を要する治療”というのは案外少なくて、『不急の治療』がほとんどなの」と歯科衛生士として働く母は話す。緊急事態宣言が発令されてから「不急の治療」においてはアポイントメントをキャンセルする患者さんも少なくなかったそうだ。緊急事態宣言が解除されてからは不急の治療でも構わず来院する患者さんもいれば、外出自粛を継続し不急の治療では来院しないという患者さんもいる。考え方は人それぞれ、個人の判断に委ねられる形となった。

診療のために公共交通機関を利用したり、人の移動が発生するなど「三密」の状態を生み出しかねない状況から、「不急の治療」を延期すること自体は正しい判断といえる。しかし、「不急の治療」ともいえる口腔ケアはウイルス感染のリスクを軽減する要素の一つになり得るため、不急の治療や歯科医院での口腔ケアを放置し続けることも問題だ。

この様なことから、急を要する治療は勿論のこと不急の治療や口腔ケアも必要に応じて行う必要があるといえる。そしてまずは一人一人が自宅における口腔ケアを意識的に行うことが大切だ。世界全体においても、まずは一人一人の意識からコロナウイルスに立ち向かっていく意識を持つことが重要である。

口腔ケア…口腔の疾病予防、健康保持、増進のこと。

コロナウイルスの感染拡大と生活の変化　～終わりに代えて～

味田　萌百

今回のコロナウイルスの感染拡大を受けて、記事を書いた学生の多くが良くも悪くも生活が一変した様子を記した。アルバイト先が休業したという同じ内容でも、自ら対策を考え新しい仕事に挑戦してみた学生や、アルバイト先からの今後の連絡待ちで収入がないまま先に進めない学生と、人によって様々であった。生活が一変した学生の中には身近な人をコロナウイルスの影響で亡くした学生もいる。このように残念なニュースによって、コロナウイルスの危険性についてより一層知ることができた。

しかし、中には外出自粛期間を利用して料理や洗濯などの家事を姉妹で分担し、親の負担を減らそうと生活を良く見直した学生もいた。私自身も暗い話題だけではなく、昼食を自分で作ったり、率先して夕飯の買い物に出かけたりと、この期間を利用してできる限りの手伝いを行った。

また、私は普段から大学やアルバイト、趣味や遊びに時間を割いていたためあまり家にいる時間がなかった。そのため家族とのコミュニケーションも必要最低限になっていたり、近くに住む祖父母の家に行く頻度も月に一度だったりとかなり親不孝な生活をしていた。しかし、この期間で外に出る時間が一切なくなったことにより、毎日のように祖父母の家に行き家族全員でご飯を食べたりと、家族と過ごす時間が増え身近な幸せに気付くことができた。

このようにコロナウイルスの与える影響は全てがマイナスなことではない。エンターテインメント業界もライブハウスの閉鎖などによってライブの中止が相次ぎ大きな打撃を受けているが、それをプラスと考える人もいる。私自身多い時には月の半分はライブやイベントに出かけたり、アルバイトで得た収入のほとんどを娯楽につぎ込んでいたため、相次ぐライブの中止を受けて自分の今までの生活を見直す機会が増えた。「大学生なのにこのままでいいのか」と感じたことで、状況が落ち着いたときの自分の生活についても考え直すことができた。

しかし、これは大学生の一意見に過ぎない。だが社会的に見てもこのようなプラスの影響を受けた事例は多くある。例えば、「前より一層健康に気を付けるようになった」や「仕事のやり方を見直すことができた」など自分たちの身近にもプラスの影響が起きているのがわかる。大きな例としても、ベネチアの運河では観光客の減少により出すゴミがなくなり、水上交通量もほぼ皆無になったことにより、綺麗で澄んだ運河の景色へと戻った。

メッセージ

今回のように9人の話が9通りあるように、人類の数だけ逸話がある。今回の記事にある一人一人の問題と社会的事象を重ねることで、少しでもプラスな面を探すきっかけや、感染拡大を防げる手助けになればいいなと感じた。

mediaction

編集長：横手里南
編集部：味田萌百、阿部奈々歩、高橋美彩紀、田村沙香、蒔田志乃、山田優太、山口崇法

2020 年 8 月創刊　第一刷